

<出演者プロフィールと発言のポイント>



アメリカ合衆国 United States of America

アンバー・パーカー

Amber Parker

シンコティグ湾 フィールド・ステーション(CBFS) 事務局長

【プロフィール】

- 1994年～ ブルーージェイ・センター(ノースカロライナ州)
環境教育部長として、プログラムの開発・実施・管理等に従事。他公園でもインタープリターのメンターやトレーナーを務める。
- 2001年～ トレモント・グレート・スモーキー山脈国立公園研究所(テネシー州)で、教育部長等を歴任。青少年プログラムの監督・管理や、様々な世代を対象とした特別プログラムのコーディネートを行う傍ら、研究所のマーケティング、広報も担当。
- 2008年～ シンコティグ湾 フィールド・ステーション事務局長
現在、ネイチャーセンター管理者協会プロフェッショナルサービス部門副会長、バージニア州東岸管理者会理事、ワロップスリサーチパーク協議会会員、NASAパートナーズ理事会メンバー、東岸部商工会議所会員委員会委員も務める



【CBFSでの実績】

プログラム実施や組織運営のあらゆる面において、顧客サービスを基本とした新たな考えを浸透させ、組織文化改革を図った。その結果、組織のミッション(使命)をリニューアルし、プログラムの拡充や財政的安定につながった。

連携・協働により会員大学の教育・研究活動の促進にも貢献したほか、環境保全・調査研究・教育を目的として、NASAをはじめ、米国魚類野生生物局、自然管理委員会、国立公園局、その他教育機関、地方自治体や州政府とも積極的に連携している。

その他、資金調達、会員やボランティア数の増加、マーケティング活動にも意欲的に取り組む。



活動
場所シンコティグ湾
フィールド・ステーション

- 【所在地】 バージニア州 ワロップス島
(アメリカの中部大西洋沿岸地域)
34001 Mill Dam Road Wallops Island,
Virginia 23337 USA
- 【アクセス】 ワシントン・ダレス国際空港から
車で南東に約3時間半。
- 【周辺環境】 バージニア州東沿岸部のチェサピーク湾と大西洋の間に位置する人里離れた地域。砂浜、砂丘、潮汐の影響を受ける河川と湿地帯、高くそびえる松の海岸林、そして大きな湾とラグーンで構成されている。
定住性や移住性の海鳥をはじめ、多くの鳥類の重要な生息地である。シンコティグ島とアサティグ島には、野生のシンコティグ・ポニーが生息する。
- 【気候】 中部大西洋沿岸は温帯気候に属し、夏は湿度が高く、冬は海の影響で比較的穏やか。
- 【スタッフ数】 正職員：14人、非常勤とインターン：40人以上
- 【沿革】 1971年にバージニア州ワロップス島に設立されて以来、湾内の水中や湿地帯、シンコティグ島やアサティグ島周辺の海の魅力や、沿岸部の林や砂丘の生態系について、あらゆる世代を対象とした教育プログラムを提供してきた。
- 【内容】 シンコティグ湾沿岸にあるCBFSでは、周囲の塩性湿地を利用した野外学習プログラムを実施。併せて屋内での講座も開催。
インタープリテーションでは、湿地帯を船で移動しながら、鳥や水生生物の観察や簡易器具を用いた潮流測定など、自然に関する知識を養うプログラムを実施。足を濡らして楽しみながら生物を見つけたり、水、泥、風、潮の流れなど自然を体感したりするプログラムなど、屋外での体験を重視した多彩なメニューを提供している。
インターンとして学生も数多く受け入れており、学生らはインタープリテーションを通して環境教育の手法を学んでいる。

発言のポイント

- ・当施設は、フィールドに出て行くための「駅」であり、屋内に誰も残らないようにすることが役割。
- ・コンピューターのことを忘れて自然体験できる機会を提供する。これが意味のあること。
- ・足を濡らし、汚れながら、環境に身を浸して自然を体感する経験はとても楽しく、泥の香りは記憶に深く刻まれ、生涯残る。体験型プログラムだからこそ、何年か後に再訪してくれる。
- ・子どもだけでなく多くの大人もプログラムの対象。共に学ぶことを重視し、家族向けを増やしている。
- ・自然環境に興味がない人にはバスケット作りやカヤック作り、写真術など、それぞれが学びたい分野を通して、いつのまにか自然への興味を高められるよう工夫している。
- ・おもてなしの心で参加者を迎えている。多くの人々が参加してくれていることに誇りを感じる。
- ・自然体験を通して、私たちは自然の一部だということを知り、自然を慈しもうという気持ちが生まれ、てくと信じている。よりよい人間になることにつながれば、自然との関わり方が異なってもよい。

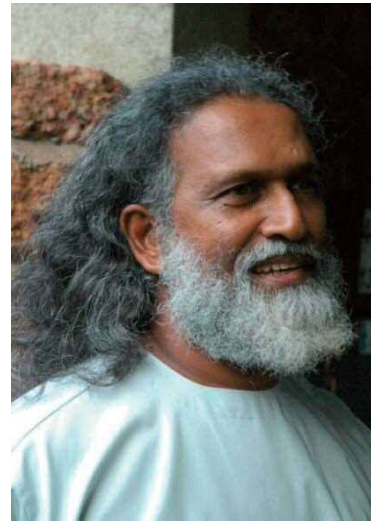


サラス・ウィマラバンダラ・コタガマ
Sarath Wimalabandara Kotagama

コロンボ大学教授(環境科学・動物学)/鳥類学者

【プロフィール】

野生生物資源保全省 科学顧問
野鳥保護団体 元会長
スリランカ科学振興協会(SLAAS) 会長
政府スリランカ・エコツーリズム協会 副会長
公開講座野生生物保護学科 講師(1974年以降)



研究に従事する傍ら、政府や非政府機関のアドバイザーも務める。国内だけでなく海外でも環境保全、動物学、教育及びフィールド生物学の推進に関する取組で著名。スリランカ固有種の鳥の発見者でもある。2003年には国際保全生物学会功労賞(環境教育・ジャーナリズム分野)を受賞。他にも数々の国際的な賞を受賞している。

2013年には、国際環境NGOバードライフ・インターナショナルの評議員に選出。スリランカでエコ・ツーリズムを始めたパイオニアでもあり、国内のエコツーリズム実践者の大半は教え子。大学教授でありながら、自ら熱帯雨林「シンハラジャの森」等でバードウォッチングや野外環境教育を実践。子どもから大学生、社会人まで広い層に自然体感プログラムを提供している。

【環境活動家として】

コロンボ大学に入学した頃、「シンハラジャの森」の伐採反対運動に加わったのがきっかけで、自然保護に関わるようになる。

1980年には、自然保護の啓発と「シンハラジャの森」保護のための研究推進を目指し、デモ行進を実施。その後の動植物学者たちの研究成果が世界遺産登録につながった。“森とその生態系”という宝物に気付き、守ってきたことが、エコツーリズムによる雇用創出や自然と共生する知恵の伝承につながり、国民の誇りとなっている。

日常生活でもエコ・ライフを実践。夫婦ともに鳥類学者。



ロケーション
森・湿地帯

対象者
小・中・高校生、大学生、社会人

活動
場所

シンハラジャ
森林保護区



【所在地】 スリランカ南部
規模：11,187ヘクタール

【気候】 熱帯雨林

【交通手段】 コロンボ バンダラナイケ国際空港から車で南に約4.5時間。最寄りの町ラトゥナプラから約2時間。

【スタッフ数】 約35名（2か所のキャンプの森でガイドサービスを提供）

【活動場所】 スリランカの国立公園の一つ。1988年に世界自然遺産として登録された。

【活動内容】 子どもたちや学生たちに自然の重要性を理解してもらうため、フィールドを教室としてプログラムを実施。

施設増築や鳥類の調査、ワークショップ開催の協力など、様々な形でスポンサー企業からの支援も受けている。

「シンハラジャの森」では、子ども向けや大学生向け、一般成人向けの各ワークショップなど、これまで、100種類以上のプログラムを行ってきた。参加者は、瞑想や野外講義、野外での採集作業、レポート作成などを通して、科学的な考え方やプロセスを学び、歴史や地域に伝わる知恵を理解する。さらに、参加者同士や関係者と共に活動することを通じて、団結することの素晴らしさや達成感、自製心、自尊心、社会の役に立っているという充実感なども得ることができる。

発言のポイント

- 世界でいろんな国が問題を抱えており、そうした状況を改善していかなければならない。環境こそがその答えになる。自然はただ美しいだけではなく、我々を取り囲むだけでなく、社会をより良くしてくれるものである。自然と共生していけるようにしていかなければならない。
- 私たちが住んでいるこの地球は自然と文化のゆりかご。環境保全活動が自然への何よりの恩返しではないか。
- 森が提供できるのは木だけではなく音もある。子どもと一緒に音を聴いてみてほしい。
- 私たちの周りは音で溢れていて、自然がどこにあるか分からない。森林には森の音があり、森林の音が聞ける。静寂の中で耳を澄ませば、自然が何かということが分かる。
- インタープリテーションとは、何かを説明するのではなく、事実をもって心に語りかけること。
- 自然は体感しなければ分からない。自然の声を聴いて、内面で感じとってほしい。ただ手をこまねているのではなく、行動することが必要。



ゲザー・マリアンネ・ヴォルツェ
Gesa Marianne Boltze

ズュートプファルツ「森の幼稚園」理事

【プロフィール】

- 1991 ～1993年 オペア・プログラムによる米国の幼稚園での実務体験(アトランタ)
- 1993 ～ 2000年 バウハウス大学(ワイマール)で建築学の博士号取得
- 2000 ～ 2001年 環境に配慮した建築実務に携わる
- 2001, 2003, 2006年 四人の子(双子を含む)を出産
- 2004年～ ズュートプファルツ「森の幼稚園」勤務
- 2005 ～2013年 発達促進協会会長
- 2013年～ ズュートプファルツ「森の幼稚園」理事



【「森の幼稚園」と私】

我が子が幼稚園に通う年齢になり、子どもの「やりたい気持ち」が尊重されて育つことのできる環境を探し始めた。そして、2004年、子どもが伸び伸び育つことのできる最高の環境「自然の中」で一日の大半を過ごす、この幼稚園を見つけた。

保護者自身が経営者でもあるため、様々な取組に関わらなくてはならない。管理業務や資金集め、日々の活動内容の企画だけでなく、フィールドで園児と一緒に過ごすようにもなった。無限の可能性に満ちた自然の素材や環境に囲まれ、生き生きと目を輝かせ創造的に活動する子どもたちと共に過ごせるという、素晴らしい機会に恵まれた。



活動
場所ズュートプファルツ
「森の幼稚園」

- 【所在地】 ドイツ、アンヴァイラー(Annweiler)の
小さな村近郊にある森林と牧草地
- 【気候】 西岸海洋性気候。雪が降ることもある。
気温は約-10℃～約35℃。
- 【園児数】 2歳～6歳、20～24名
- 【教師数】 4～6名



- 【沿革】 ズュートプファルツ「森の幼稚園」は、同じ志を持つ保護者らが共同で資金を用意し、環境保全を目的とした体験型農園から土地を借りて設立。森と広場の間の山地にあった牧草地は、「天使の牧草地(エンジェル・メデー)」と名付けられた。
設備は、当初、工作材料の保管用トレーラーがある程度だったが、その後、柳のドームや自然と戯れることのできる巨大な砂場ができ、そして2009年には、雨天に食事などができるよう保護者によってティピ(テント)が作られた。
- 【概要】 開園時間: 月～金曜日 午前8時～午後0時半まで
(昼食をとり、午後も園で過ごす子どももいる)
登園手段: 保護者の送迎
- 【活動内容】 園児は天候に関わらず毎日外で遊ぶ。
幼児(3～6歳)は、最大16名のグループ毎に「天使の牧草地」近くの森などへ散歩。冬は日当たりの良い場所、夏は日陰の小川などで過ごす。乳児(2～3歳)は最大5名のグループに分かれて様々な活動に参加。気温に応じてティピ(テント)内での活動も行う。いずれのグループも教師と保護者などのボランティア、臨時職員が引率する。
体験型農園では、家畜に直接触れながら餌を与えたり、ジャガイモやリンゴの収穫を手伝ったりする。自然の移り変わりや、野菜の栽培には手をかけることが必要だということをもっと体験することで、私たちの命を支える食料への感謝の気持ちも育まれる。

発言のポイント

- すべての子どもには、自然の中で育つ機会があるべき。自然の中は、情報過多な環境とは全く違う、満ち足りて育つことのできる環境である。
- 幼少時代は感性を養う時期。小さな芽を育てることは、早い段階からやるのが重要。
- 一年中戸外で活動することで、自然の移り変わりを感じるができる。
- 泥は物を作るのに格好の材料。子どもたちにとって冒険はご褒美。戸外で自由にのびのびと動き回ることが健やかな体を作り、創造性を培う。夢中になって様々なことを学び、感覚が発達し、自然に敬意を払うようになり、生き物を守るようになる。自然のありがたさは体験しなければ分らない。
- 幼い頃に自然を体感する機会を確保することが、かけがえのない自然を尊重する、自立した人格を育てる一番の方法。

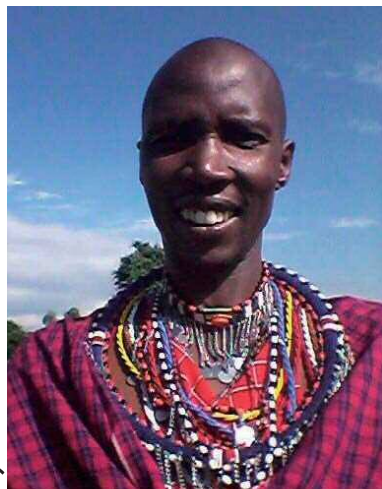


サムウェル・ナイカダ Samwel Naikada

マサイの森「デュポト・フォレスト」リーダー

【プロフィール】

- 1993年～ 勉強がしたい一心で自身の結婚式を取りやめ、高等学校(彼の住む地域では初の高校)を受験。勉学に励み環境への興味を抱く。
- 1997年～ 動植物の豊かなニエクウェリ地域の森林を守るため、デュポト野生生物・森林協会を結成。
- 1998年～ 観光業について学ぶため、ナイロビへ移る。
- 2001年～ 慈善団体として認可を受けるため、データ収集、書類作成、ドイツの国際協力機構(GTZ)との交渉、会員開拓、周辺ロッジへの協力要請・広報など、創立時の中心的メンバーとして活動。
- 2004年～ キルゴリスやニエクウェリの森周辺で、自然保護プロジェクトに従事。
- 2008年～ ポズナン(ポーランド)で開催された世界気候会議に参加。その後も、2009年のコペンハーゲン(デンマーク)会議、2010年のカンクン(メキシコ)会議、2011年のダーバン(南アフリカ)会議に参加。
- 2012年～ 自然保護分野で「野生生物管理学(Wildlife Management)」修士号取得。「野生生物保護と損害補償に関する法律」に定める「地方委員会」のうち、ニエクウェリの森のある「トランスマラ準郡」に設置する委員会の委員の一人に選ばれる。



活動
場所

デュポト・フォレスト

- 【所在地】 ナロック郡トランスマラ準郡ロルゴリアン区
P.o Box 50-40701 Lolgorian, Kenya
- 【気候】 19℃～25℃の温暖な気候。毎年3月～6月の雨季には激しい降雨がある。
- 【交通手段】 マサイマラ国立保護区から西に22kmの場所に位置する。
舗装された道路はなく、路面状態の比較的良好な7月～1月の乾季を除き、四輪駆動車でしかアクセスできない。
- 【周辺環境】 高木の枝葉がすき間なく連なる「樹冠」があり、川が流れる森
- 【スタッフ数】 経済的な理由により職員はおらず、現在は地域の利益と森林保護を目的としたボランティアスタッフで運営。15名の地域偵察メンバーがボランティア活動として森をパトロールし、ビジターへの安全を確保している。
- 【沿革】 活動場所である森林は、トランスマラ準郡に残る唯一の自生の森であり、水や薬用植物、塩分の供給源として、長年、地域の人々によって管理・所有されてきた。
しかし、自然資源への商業的需要が高まる中、この森林資源は枯渇の危機に直面。そこで、地域を代表してニエクウエリ地域の様々な取組を調整し、森林の保護・管理を行うことを目的に、2001年から積極的な活動を開始。
現在365名の森林地権者の地域住民とその親族が在籍。自薦他薦で選ばれた13人で構成する委員会が運営している。
- 【活動内容】 自然環境保全活動の促進を図り、かつ周辺の住民の観光収入や雇用機会の増大につなげるため、地権者が土地を手放さないように森林保護の重要性を説く活動を展開。あわせてビジター向けの体験プログラムを実施する。
- <プログラム例>
- ・神聖な木々が存在し、200種類を超える鳥類とゾウ、バッファロー、レオパード、ブッシュバックなどの生息地でもある森において、サファリツアーやバードウォッチングを実施
 - ・ピクニック、バード・ウォッチング、キャンプの場の提供
 - ・簡易トイレや遊歩道の整備
- など

発言のポイント

- ・環境破壊は全人類に影響を及ぼすが、森林に依存する伝統的な生活を送るマサイは、真っ先にその影響を受ける。マサイの文化を維持するためには自然との共生が必須。
- ・森では人と自然との関わりや自然の大切さを体感でき、自然からの恩恵に気づくことができる。私たちの世代が多くを破壊してしまったが、いいものを残し次世代に享受してほしいと思う。
- ・文明は不便だと思う。地域の伝承や文化を尊重することも大切。平和や持続可能性は必要不可欠。
- ・保全は難しく、一人ではできない。皆でやらなければならない。次世代に豊かな自然を残すため、まずは皆で参加し、関与することから始めること。そうすれば、態度が変わっていき、環境保全につながっていくと思う。



ジェイミー・セデーニョ・ソリス Yeimy Cedeño Solis

環境エネルギー省保全地域庁
地域連携環境教育コーディネーター

【プロフィール】

1998年 コスタリカ国立大学熱帯生物学部学士取得

2005年 コスタリカ国立大学野生生物保全管理学部
理学修士取得

2008年～2014年 環境エネルギー省(MINAE)保全地域庁にて、テンピスケ保全地域の環境
教育プログラムと技術支援エリアコーディネーターを務める。

2014年～現在 環境エネルギー省(MINAE)保全地域庁にて、テンピスケ保全地域の野生
生物保護プログラムのコーディネーターを務める。



【現在の職務】

- テンピスケ保全地域の環境教育に関する地域プログラムのコーディネートと実施運営
- テンピスケ保全地域全域の環境教育に関する計画の立案
- 自然保護や環境教育、ゴミ処理に関する省庁間のコーディネート
- 地元地域の参加を促す保護地域の管理計画の指揮
- 保全地域庁(SINAC)の高等教育機関の研修プログラムを担当
- 国連環境計画(UNEP)環境研修ネットワークの中南米及びカリブ海地域の中心的役割を担当
- 野生保護地域での開発及び管理計画のためのテンピスケ保全地域技術チームの一員



活動
場所

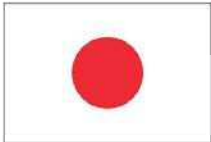
テンピスケ保全地域

- 【所在地】 中米に位置するコスタリカは地球の表面積の0.03%(51,100km²)の国土しかない小さな国だが、生物多様性の豊かな上位20ヶ国のうちの一つである。国土は11の保全地域に区分され、その一つであるテンピスケ保全地域(ACT)は、ニカラグアとの国境に近い北部に位置するグアナカステ州ニコヤ半島にある。
- 【概要】 11の各保全地域は環境エネルギー省(MINAE)所管の保全地域庁(SINAC)が管理している。SINACは、保全地域の管理のほか、国内の森林や野生生物をはじめとする天然資源の持続的管理のため、保全活動を推進している。
- 【気候】 12月から4月までは乾季で、2015年はエルニーニョ現象の影響が深刻であった。5月から11月の雨季はグリーン・シーズンと呼ばれ、熱帯のうららかな天候に恵まれることもある。平均気温は30℃程度。
- 【スタッフ数】 現在98名の職員で、いくつかの地域プログラムを実施している。ACTの予算や人員は非常に限られているため、プログラムを効果的に実施するためには他機関やNGOとの連携が必須である。
- 【活動内容】 どのような行動が生物多様性や生態系の保全につながり、反対にどのような行動が環境問題を引き起こすのか、そして、最終的に自身の生活にどんな影響を及ぼすのかということを知ってもらうために、地域住民に啓発活動を行っている。
- 理解が深まれば生活習慣や行動が変わっていくことから、インタープリテーションを通して、環境問題が実は自身の生活に密接に関わっていることを伝えることが重要と考えている。具体的には、例えば、子どもたち向けには、自然を体感するゲームを通して、気候変動や山火事、ごみ問題、水資源、保全地域など、地域のあらゆる環境問題について、楽しみながら理解できるプログラムを実施している。
- この地域ではウミガメの産卵を見ることができることから、これを利用したインタープリテーションも実施。地域住民や旅行者にウミガメの産卵にはどのような行動が悪影響を与えるかを考える機会を提供し、ウミガメの産卵を守っていくことの大切さを訴えている。



発言のポイント

- ・人々のあらゆる行動が環境に影響している。たった一人の行動であっても。
- ・人なくしては保全はありえない。保全の目的達成のためには、科学的な知識を地域の人に伝えることが不可欠。経験を通じて生態系の重要性を理解すると、自分が環境の一部だと感じるようになる。そして、人々の環境との関わりが変わっていき、責任ある考え方に基づいて資源を使うようになる。
- ・活動を通して皆で環境の大切さを分かち合うことが重要。
- ・「行動」は言葉を並べるよりも多くを伝えることができる。
- ・環境問題を解決するためには、答えをすぐ求めるのではなく、体験を通して感性に働きかける必要がある。科学の目だけでなく、感情・感覚を開いていくことが大切。エモーションを伝えていくことが大事。結果をすぐに求めるのではなく、プロセスを変えていく必要がある。



浅野智恵美 Chiemi Asano

NPO法人もりの学舎自然学校 インタープリター

【プロフィール】

- 2005年 愛知万博の「森の自然学校」で、インタープリター（森の案内人）として従事
- 2006年 平成18年度地球温暖化防止活動（環境教育・普及啓発部門）環境大臣表彰
- 2007年 愛・地球博記念公園内の愛知県の環境学習施設「もりの学舎」で再びインタープリターに。
NHK環境教育番組「どーする？地球のあした」の質問コーナーで、回答者を1年間担当。

2012年10月～2015年4月

米国ケンタッキー州在住

この間に、グレイシャー国立公園、イエローストーン国立公園、ヨセミテ国立公園、エバーグレーズ国立公園など17の国立公園を訪れ、レンジャーガイド付きプログラムやレンジャーツアーなどに参加。

2014年～ 消費生活論文「アメリカの生物多様性と国立公園運営—その魅力と課題」を執筆。また、シンシナティ・ネイチャーセンターの年間メンバーとなり、楓の樹液を集める森のツアーや森の中で開かれるアースデーイベント、ナイトツアーなどを体験し、森に10あるすべてのトレイルを制覇。

【主な活動】

愛知県環境審議会委員、愛知県環境教育等推進協議会委員、あいち森と緑づくり委員会委員、衣浦港3号地廃棄物最終処分場環境監視協議会委員などを歴任。（財）愛知県教育振興会発行、家庭と学校と地域を結ぶ月刊誌「子とともにゆう&ゆう」で、環境教育をテーマとした『すてき快適エコライフ』の記事を毎月執筆（2009年4月号～2010年3月号）。

地球温暖化防止、省エネ、3R、ごみ削減、生物多様性、消費者教育等をテーマとした講座を通し、学校教育、自治体事業に携わる。

環境カウンセラー（環境省認定）

NPO法人愛知環境カウンセラー協会理事

ネイチャーゲーム指導員

（公社）NACS消費生活研究所主任研究員

消費生活アドバイザー



活動
場所まなびや
もりの学舎

【所在地】 愛知県長久手市茨ヶ廻間乙1533-1
愛・地球博記念公園(モリコロパーク)内

【アクセス】 東部丘陵線(リニモ)「愛・地球博記念公園駅」下車後、園内バスまたは徒歩

【従業員数】 インタープリター(30歳代から70歳代までの愛知県民)男女約50名

【沿革】 2005年開催の愛知万博の森林体感ゾーンで実施された自然体感プログラム「森の自然学校」には、会期中に50万人を超える参加者があった。
閉幕後、その取組を継承・発展させるために、万博期間中に使用されたフィールドセンターの建物を愛知県が改修し、「もりの学舎」が2007年3月にオープン。現在は、愛知万博時に一般県民から募集・養成したインタープリターで立ち上げた「NPO法人もりの学舎自然学校」が、愛知県からの委託を受けて様々な自然体感プログラムを提供している。
地元のインタープリターが身近な都市公園で行うツアーや工作教室などは幅広い世代に好評で、2015年7月には来館者数が40万人を突破した。

【周辺環境とインタープリテーション内容】

名古屋市東部に広がる丘陵地は、東山から連なり、モリコロパークや瀬戸・海上の森など、豊かな自然が広がっている。この森は古くから栄えた窯業などの影響で何度もはげ山になりながらも、人の手によって再生されてきた。また、湿地が点在し、この地方固有の種も育んでいる。自然と人の営みがつながりあい、共存してきた、まさに「身近な自然」が私たちのフィールド。

●自然体感プログラム

都市公園などの身近な自然の中で、五感を使った体験を通じて自然に親しみ、関心を持つキッカケづくりを中心に実施。森の中での体験を通して多様な自然に気づき、自分の周りの環境に関心を持つことは、自然を守る行動につながっていくと考えている。
「インタープリターと歩くもりのツアー」、「おさんぽdeいきものみつけ」など。

●もりの学舎キッズクラブ

森の中や水辺での生きもの探しのほか、多様な企業との協働によるプログラムなどを実施し、広く自然・環境を学ぶ機会を提供。約100名の小学生が1年を通じて「もりの学舎」などでの様々なプログラムに参加し、自然にふれあう体験等をしている。

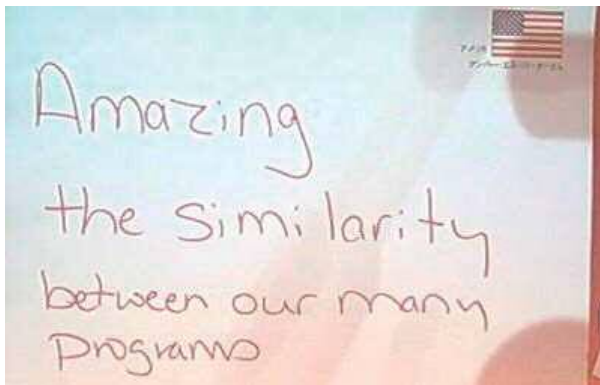
発言のポイント

- ・インタープリターは、人と自然の橋渡し役。自然の情報を伝えるだけでなく、その背後にある意味を伝え、参加者に気づいてもらう役目を担っている。
- ・プログラムに責任を持ち、参加者が発見する喜びを大切にしている。五感をフル活用し、時には旬の自然を生かして、わくわく感を演出する。参加者の笑顔は、何よりのご褒美である。
- ・多くの方々に「もりの学舎」にお越しいただき、実際に「体験」や「発見」をしていただきたい。
- ・愛知万博は「自然の叡智」が基本コンセプトだった。日本の自然が、そして世界の自然がより豊かさを増し、次世代につながっていくことを願っている。

<交流セッションでの各インタープリターの回答とコメント>

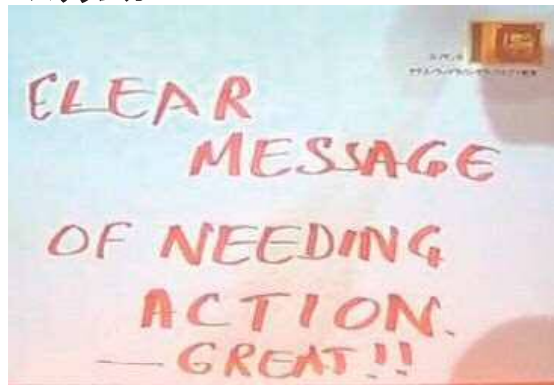
質問① 他国のインタープリターの発表を見ての感想

アメリカ



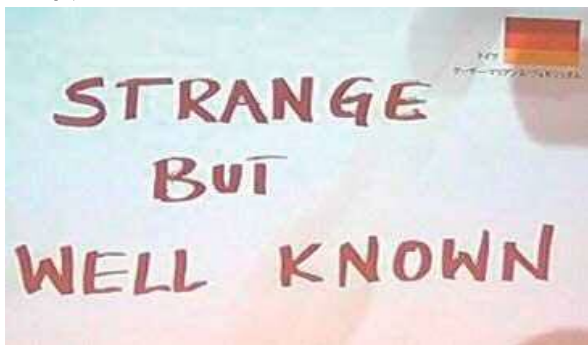
異なる地域で異なるプログラムを実施しているが、同じことを伝えていたことが驚き。これからも愛、敬意、感性が重要だと伝え続けていきたい。

スリランカ



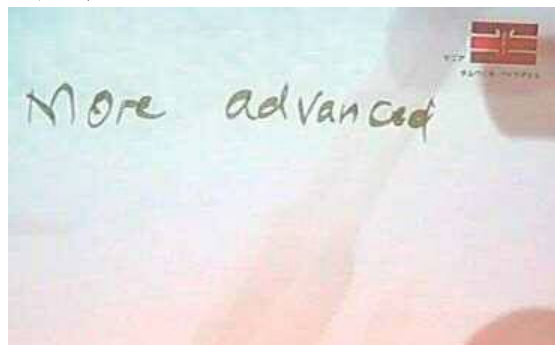
我々全員が、何かをしなければならない。ただ手をこまねいているのではなく、行動が必要である。

ドイツ



国が異なり互いに知らないこともあるが、メッセージはよく知っているものだった。同じ地球に住み、思いを共有している。

ケニア



他の国のプログラムは先進的で、うまくまとまっている。我々の活動も、整理し、新たなことを取り入れ、うまく回るようにしていきたい。

コスタリカ



離れた国から集まったが、メッセージは似ている興味深い。歩みをともにし、結びついていることが分かり、刺激を受け、元気づけられた。

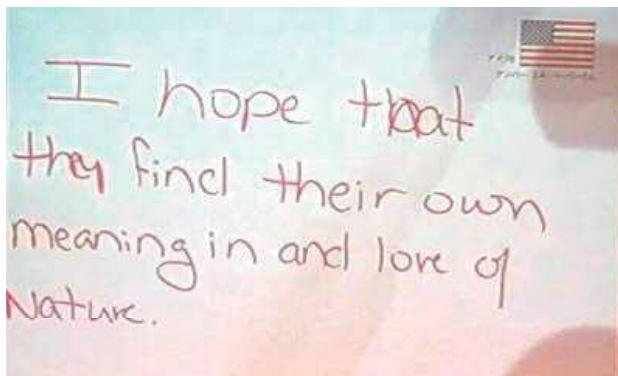
日本



どれも魅力的なプログラムで、それぞれの場所に行って体験してみたい。

質問② インタープリテーションによって参加者に伝えたいこと

アメリカ



体験によって自分が自然の一部だということを知り、参加者自身で自然の中に意味を見出し、自然を愛して欲しい。それによって参加者が自分自身を高めることにつながれば、関わり方は異なっても構わない。

スリランカ



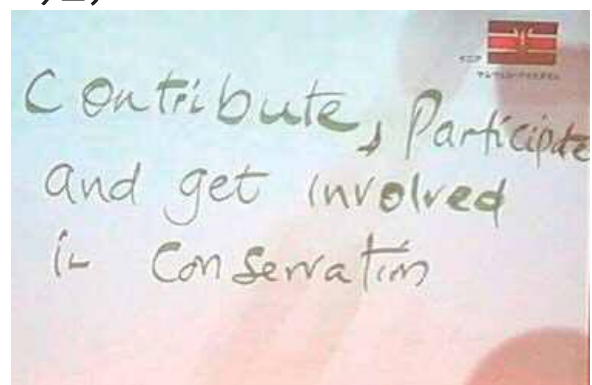
まずは、自然の声を聴いてほしい。そして周りの人間の声を聴き、自然や社会のために取り組んでほしい。

ドイツ



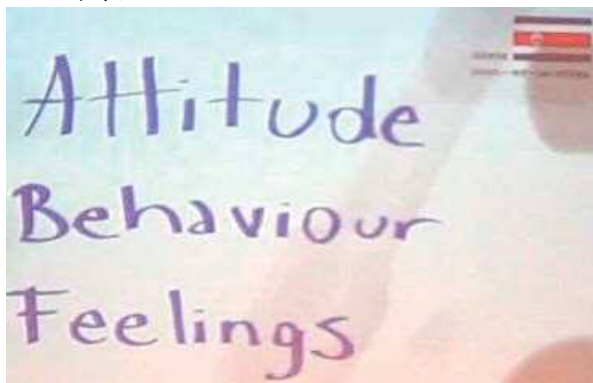
自然からのメッセージを伝えれば、それは子どもたちの心に根付き、正しい考えを持って巣立っていってくれる。早期に始めることが重要。

ケニア



環境保全は皆で一緒にしなければ成しえない。まずは保全活動に参加し、関わってほしい。そうすれば、態度が変わり、自然や地球を愛するようになる。

コスタリカ



責任感のある人を育てるためには、態度や行動を変え、意識や感性を養うというプロセスが大切。自然がなくては生きられないのだから、環境との関わりを真に理解し意識していく必要がある。

日本



参加者の満面の笑顔から、自然について何らかの幸せな気づきにつながったのだと感じた。そうした笑顔を引き出せる活動を目指していきたい。

<交 流 会>

トーク・セッション後には、会場を愛知県立大学食堂に移して、海外インタープリター、翌日に自然体感プログラムを実施する国内インタープリター、ブース出展した環境活動団体、企業、行政関係者等の皆さん約110名が参加して、交流会を開催しました。



No.	ブース等出展団体名
1	アイシン精機株式会社
2	愛知県シェアリングネイチャー協会
3	愛知県立大学茶華道部
4	イオンリテール株式会社 東海・長野カンパニー
5	NPO法人 海上の森の会
6	東邦ガス株式会社
7	西尾市観光協会
8	ネイチャークラブ東海
9	花の王国あいち県民運動実行委員会
10	ユニーグループ・ホールディングス株式会社
11	あいち海上の森センター
12	AEL ネット（愛知県環境学習施設等連絡協議会）
13	もりの学舎（まなびや）
14	愛知県

五十音順（行政関係を除く）

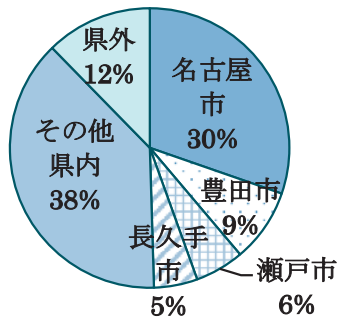


<トーク・セッション会場参加者へのアンケート結果概要>

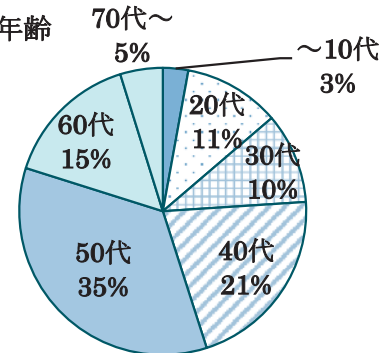
回収数：319枚

参加者について

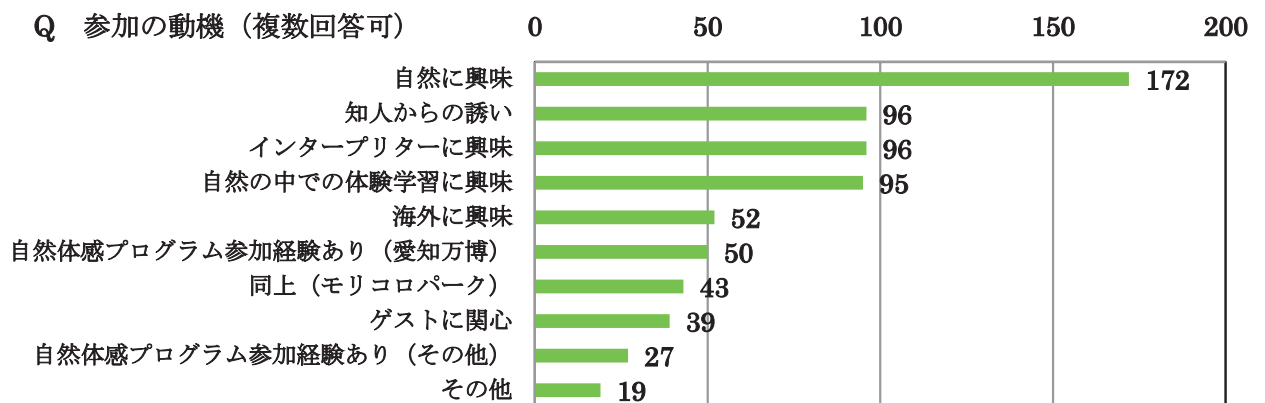
Q 居住地



Q 年齢

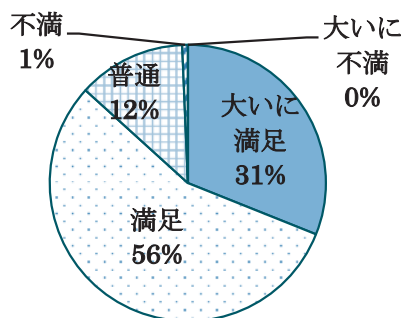


Q 参加の動機 (複数回答可)

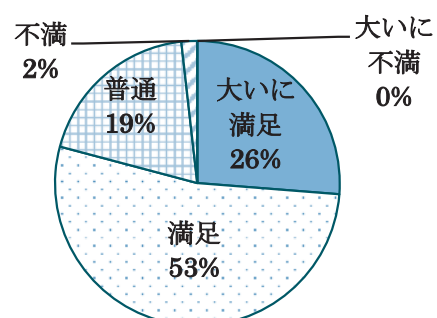


内容について

Q 活動発表の満足度



Q 交流セッションの満足度



意見等

- ・時間が短い。
- ・もう少し詳しく聴きたかった。
- ・ムービー、スライドが分かりやすかった。
- ・近所の草木や月など身近な自然を常に感じられることに興味を持てる教育があるとよい。
- ・すぐに結果が表れず利益に直結しないが、人に大切な養分のようなことはたくさんある。
- ・具体的なESDを感じられた。
- ・「自然」と「子どもの時の体験」がキーワードだと思った。

- ・時間が短い。
- ・会場との交流がもっとあればよかった。
- ・もっと生の話を聴きたかった。
- ・ライブで答えを聞け、臨場感があった。
- ・差が出る質問があっても面白かったのでは。
- ・見るだけでなく、活動・参加して直接手をかけることが重要だと感じた。
- ・単に講演を聴くだけでなく、色紙によるアンケートがあったり、参加型なのが良かった。
- ・子どもたちにたくさん自然体験をしてほしい。